

## Philosophy - 2

先週の土曜日では、ただでさえ少ない授業なのに、クラブの試合で数人が出席できず、残念でした（本人は残念とは露も思っていないかも知れませんが）。授業ではデカルトたちを扱ったのですが、非常に重要なことがかつ難しいのでもう一度説明したいのですが、それは次回に回し、今日は再び「哲学とはなんぞや」について話したいと思います。

ときどき政治家などを批評して「あの政治家には哲学がない」などと言われます。この場合、哲学という言葉は、しっかりした信念のような意味です。そういう信念がないので、一貫した政策がとれずに、何かあれば意見が変わる（ぶれる）のです。あるいは、僕たちのレベルでも、何か重要な決定をして、「これが僕の哲学だ」というようなこと言うこともあります。この場合、哲学とは「人生観」あるいは「世界観」という意味です。しかし、正確に言うと、人生観や世界観と哲学は違います。どう違うかということ、哲学が学問であるという点です。学問は、しっかりした説明の上に立つ理論であって、人生観や世界観は、時には別に説明もなしに、ただそうだと考えている場合もあるのです。

学問とは何か、あるいは学問にはどんな種類の学問があるのかということに初めて考えたのがアリストテレスです。彼はこう説明します。人間がものを知るのは、学問だけではない。もしそうなら、学問をしない人は何も知らない人になる。人間は普段の生活の中で、様々な経験しているんな知識（経験知）を得ていきます。例えば、「腹が痛むときはこの薬を飲んだら治る」というのは経験知ですが、医学の心得がある人は、「その腹の痛み方からして、それはハラクダールという病原菌に感染したに違いない。さらば、あの薬草を煎じて飲め」とか言って、原因を特定しその治療法を教えるわけです。つまり、経験知は、なぜそうなるかを知らないけれど、確かに効果を上げます。これに対して、学知（学問によって得る知識）は原因を知って、そこから理詰めで説明するのです。野球で「なんでかわかんけど、投げるときに球をこういうふうにはひねったら、変化球が投げられる」という人は、野球を経験した人の知識。「そういうふうには球をひねると、空気の抵抗がこうなってああなるから、球が曲がるんや」というのは、流体力学を知っている人が言えることです。



アリストテレスは、この経験と学問の違いを鮮明にして、学問とは「原因についての確かな知識」と定義しました。つまり、「なぜか」がわかっていることが大切なのです。また例を挙げましょう。歴史は年代を覚えることと思っている人は少なくないでしょう。けれど、「794年に桓武天皇が京都に遷都して平安京を作った」と知っていることだけでは歴史家とは言えません。「なぜその年に遷都したのか」、「なぜ都のために京都という盆地を選んだのか」などという問いを考えて答えを出すのが歴史家なのです。もちろん、中学や高校ではまず歴史的な事実（史実と言います）を覚えるのが先決ですが、それは本当の歴史学ではなく、歴史をするための基礎作業のようなものです。

学問のもう一つの条件は、結論が同じ条件下にある他の場合にも適応できるということです。ここで「個別的 individual」と「普遍的 universal」という言葉を知っておいてください。個別的というのは、あるとき、ある場所で一度だけ当てはまることです。経験と言ふことは個別的なことです。ヘラクレイトスが言ったように、「同じ川に二度入ることはできない」のです。しかし、それに対して、どこでもいつでも当てはまるものもあるのです。例えば、数学の定理。ピタゴ

ラスの定理は古代ギリシア時代でも現代の日本でも、アフリカでもアメリカでも当てはまる。これを普遍的と言います。

ところで、学問であるための条件は結論が普遍的であることです。本当に原因がわかるなら、結果が必然的にわかるからです。例えば、医学の例では、「この薬は太郎には効いた、また二郎にも効いた」ということを知っているのは経験知なのですが、この場合、なぜその薬が効くのかかわからないので、三郎には効くかどうかやってみないとわからない、これは学問ではないのです。それに対して「この薬はこういう性質を持っているから、こういう体質の人に効く」、つまり、Aさん、Bさんだけでなく、同じ体質の人ならみんなに効くということを知っているのが医学の知識と言えます。別の言葉でいうと法則を知るので、同じ条件であれば、いつも一定の結果が生まれると言うことを予測できるのです。もちろん、実際は、ある出来事には多くの要因がついてくるので、必ずしも予測の通りには行かないのですが、それはわかっていた原因と結果の関係が間違っていたからではなく、別の想定外の要因が働いたからなのです。先ほどの例だと、同じ体質でも、そのときそのときで体調が異なれば、あるいは食べたものの関係などで、薬が効くか効かないかが変わってくるでしょう。

「毎年巨額の予算を使いながら、東北の地震や阪神大震災のような巨大地震さえ予測が出来なかったやんか」と非難されている団体がありますが、これは地震が地面の下で起こることなので、まだまだそのメカニズム（どのようにして地震が発生するのか）がよくわかっていないか、予兆があったとしてもそれを感知するのが非常に難しいからか、でしょう。それがわかれば、予測は可能のはずです。

こういった自然現象に対して、人間の人生は個別的で、ちょっと怖い例で申し訳ありませんが、人間は必ず死ぬということは普遍的な真理ですが、では私はいつどこでどのように死ぬのかは学問ではわかりません。つまり、個人の人生については学問的に予測できないのです。しかし、自分の将来を知りたいという切実な思いは誰にでもある。そこで占い師や自称予言者と言われる人がいるのです。占いは、「あなたには、近々、こういうことが起こる」というまったく個別的なことで、私たちが知りたいことを教えます。不思議なことに、人間には地震学者の言うことより予言者と言われる人の言うことの方を聞く傾向があるようです。

学問のもう一つの条件は、言葉で説明できるということです。プロ野球の選手で国民的な人気を博した長島茂雄という人がいます。この方は、選手としてはすごい人でしたが、選手を指導するときには、例えば「ボールがビューと来たら、バシッと打て」とかいうふうな指導をするらしいです。これはバッティングを言葉で表しているのではなく、感覚的な指導ですね。こういうのは、本人はわかっても、他の人には何のことかわかりません。いつもデータを駆使し理詰めで作戦を立てていた元楽天の野村監督は、「コンピューター野球」と言われていたのに対し、長嶋監督は「カン（勘）コンピューター野球」と言われていたのが、言い得て妙ですね（うまいこと言いはる、という意味）。でも、どちらがよりすぐれているかは簡単には言えません。



ということで、哲学は理詰めでこの世界や人間がどうなっているかを説明しようとする学問だということです。これからも授業でその発展を見ていきたいと思えます。

